

第4回研究会

I - 1 コルサコフ症候群における歌詞の記憶について ——歌うと覚えやすいか?——

°若松 直樹¹⁾ 谷田 和子¹⁾ 吉益 晴夫¹⁾ 原 常勝¹⁾
加藤元一郎²⁾ 三村 將²⁾ 鹿島 晴雄³⁾

従来よりコルサコフ症候群の記憶訓練に際してさまざまな strategy を用いる方法が試みられてきている。これらの中には、視覚イメージを用いる方法・語頭音や文章化による言語的戦略・動作・身振りを用いる方法などが挙げられる。

これらはいずれも何らかの形でコルサコフ症候群の新規記憶の際のコード化を増強しようとする試みである。

これらの方法の有効性に関しての報告は一定ではなく、むしろ各症例により、その残存能力を踏まえて個々に有効な方法を検討する必要を示唆している。

今回、我々は継続しているコルサコフ症候群の記憶訓練において、記憶戦略の一つに歌を用いることを検討した。それは、精神科病院（アルコール専門病棟）という環境にとって、歌を歌うこと（カラオケ）がレクリエーションなどをとおして、日常的に比較的取り組みやすいためでもある。

コルサコフ症候群の歌詞の記憶について、記憶学習を言語的学習のみの場合と、実際の歌を聴き自らも歌うという場合に分けその乖離を検討した。

【対象】 駒木野病院アルコール専門病棟に入院中のコルサコフ症候群の男性患者さん5名。平均年齢59.8歳。平均教育歴12.2年。平均FIQ(WAIS-R)90.8である。全例とも離脱症状等は認められない。

【方法】 顕在的記憶および親近感も認められないことを根拠に未知と推定される2曲の歌(演歌)を用意する。曲は1・2番を使用し、一曲につき全体で6カ所の歌詞の部分的空白を作成する。

2曲の歌について両方の歌詞を記憶することが課題となるが、1曲はスタッフによる歌詞の朗読の聴取および、参加者全員での朗読反復により歌詞を記憶させる（これを melody [-] とする）。

また、もう1曲は当該歌手による歌唱（カセットテープ）の聴取および、参加者全員で歌を歌うことにより歌詞を記憶させる（これを melody [+] とする）。

学習段階の直後に歌詞の部分的空白の再生検査を行い、その後に再認検査をあわせて実施した。結果の評価は再生・再認とも歌詞の部分的空白の正答数で行った（max = 6点）。

なお counterbalance を考慮し、スタッフによる朗読または歌手による歌唱は、訓練ごとに提示順序を交互にした。また、朗読または歌唱どちらの方法でも、学習段階において歌詞の聴取を1回・反復を2回行い、正答の確認段階で歌詞の聴取のみを1回行った。訓練期間は平成8年7月から8月である。

【結果】 参加者ごとの比較では、訓練により再生検査において melody [+] の正答が優位であり、かつ melody [-] との間に乖離が認められた例や、その差のほとんど認められない例などが混在した。

全参加者の全セッションの平均正答値から、再生・再認ともに melody [+] の場合に正答反応の上昇が linear である傾向が認められた。

1) 駒木野病院

2) 東京歯科大学市川総合病院精神神経科

3) 慶應義塾大学医学部精神神経科

【考察】歌詞の記憶について、歌を聴き自らも歌う場合に若干であるが課題が早期より達成され、安定して上昇する傾向がみられ、melodyの使用がstrategyの一つとなる場合のあることがうかがえた。

日常生活上の記憶すべき課題について、それに曲をつけて覚える取り組みなどの可能性が示唆された。

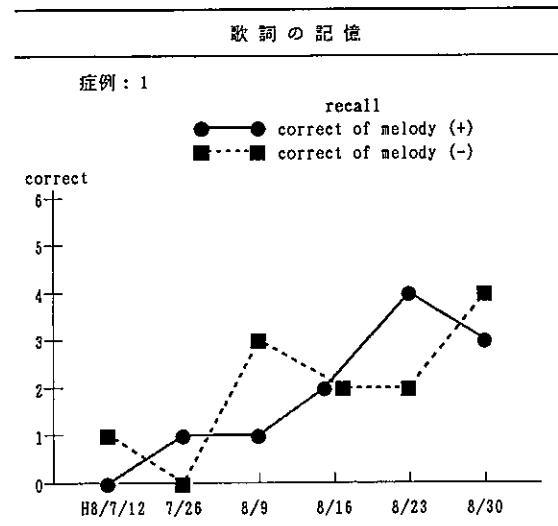
なお、今回の訓練では学習段階(in put)に「歌手による歌唱(melody)」を用いた場合に、その反応段階(out put)では melody の提示は行わなかった。melody の提示をした場合の評価が考えられた。

また、参加者が実際に歌を記憶のみで歌うことができるかという点の評価の必要性が思われた。

リハビリ参加者のプロフィール

	年齢	性別	教育歴	PIQ(WAIS-R)	Att./Con.(WMS-R)	Delayed(WMS-R)
症例 1	55	M	12	95	112	50
症例 2	55	M	12	81	75	60
症例 3	54	M	12	79	103	51
症例 4	62	M	9	86	90	50
症例 5	73	M	16	113	104	67
mean	59.8		12.2	90.8	96.8	55.6

歌詞の記憶



歌詞の記憶

